

源氏物語

空蟬

紫式部

青空文庫

うつせみのわがうすごろも風流男に馴な
れてぬるやとあぢきなきころ（晶子）

眠れない源氏は、

「私はこんなにまで人から冷淡にされたことはこれまでにないのだから、今晚はじめて人生は悲しいものだと思われた。恥ずかしくて生きていられない気がする」

などと言うのを小君こぎみは聞いて涙さえもこぼしていた。非常にかわいく源氏は思った。思いなしか手あたりの小柄なからだ、そう長くは感じなかったあの人の髪もこれに似ているように思われて

なつかしい気がした。この上しいて女を動かそうとすることも見苦しいことに思われたし、また真から恨めしくもなっている心から、それきり言^{こと}づてをすることもやめて、翌朝早く帰って行つたのを、小君は氣の毒な物足りないことに思つた。女も非常にすまないと思つていたが、それからもう手紙も来なかつた。お憤^{おこ}りになつたのだと思うとともに、このまま自分が忘れられてしまうのは悲しいという気がした。それかといつて無理な道をしいてあの方が通ろうとなさることの続くのはいやである。それを思うとこれで結末になつてもよいのであると思つて、理性では是認しながら物思^{もの}いをしていた。

源氏は、ひどい人であると思ひながら、このまま成り行きにま

かせておくことはできないような焦慮を覚えた。

「あんな無情な恨めしい人はないと私は思つて、忘れようとしても自分の心が自分の思うようにならないから苦しんでいるのだよ。もう一度逢^あえるようないい機会をおまえが作つてくれ」

こんなことを始終小君は言われていた。困りながらこんなことででも自分を源氏が必要な人物にしてくれるのがうれしかった。

子供心に機会をねらっていたが、そのうちに紀伊^{きいのかみ}守が任地へ立つたりして、残っているのは女の家族だけになったころのある日、

夕方の物の見分けの紛^{まぎ}れやすい時間に、自身の車に源氏を同乗させて家へ来た。なんといつても案内者は子供なのであるからと源氏は不安な気はしたが、慎重になどしてかかれることでもなかつ

た。目だたぬ服装をして紀伊守家の門のしめられないうちにと急いだのである。少年のことであるから家の侍などが追従して出迎えたりはしないのでまずよかった。東側の妻戸つまどの外に源氏を立たせて、小君自身は縁を一回りしてから、南の隅すみの座敷の外から元氣よくたたいて戸を上げさせて中へはいった。女房が、

「そんなにしては人がお座敷を見ます」

こごとと小言を言っている。

「どうしたの、こんなに今日は暑いのに早く格子こうしをおろしたの」「お昼から西の対たい——寝殿しんでんの左右にある対の屋の一つ——のお嬢様が来ていらっしつて碁を打っていらっしやるのです」

と女房は言った。

源氏は恋人とその継ままむすめ娘が碁盤を中にして対むかい合っているのをのぞいて見ようと思つて開いた口からはいつて、妻戸と御簾みすの間へ立つた。小君の上げさせた格子がまだそのままになつていて、外から夕明かりがさしているから、西向きにずっと向かうの座敷までが見えた。こちらの室の御簾のそばに立てた屏風びょうぶも端のほうが都合よく畳まれているのである。普通ならば目ざわりになるはずの几帳きちようなども今日の暑さのせいで垂れは上げて棹さおにかけられている。灯ひが人の座に近く置かれていた。中央の室の中柱に寄り添つてすわつたのが恋しい人であらうかと、まずそれに目が行つた。紫の濃い綾あやの単衣ひとえ襲がさねの上に何かの上着をかけて、頭の恰か好こうのほっそりとした小柄な女である。顔などは正面にすわつた

人からも全部が見られないように注意をしているふうだった。瘦^やせつぽちの手はほんの少しより袖^{そで}から出ていない。もう一人は顔を東向きにしていたからすっかり見えた。白い薄^{うす}衣^{もの}の単衣襲^{うすもの}に淡^{うすあい}藍色^{こうちぎ}の小桂^{こうちぎ}らしいものを引きかけて、紅^{あか}い袴^{はかま}の紐^{ひも}の結び目の所までも着物の襟^{えり}がはだけて胸が出ていた。きわめて行儀のよくないふうである。色が白くて、よく肥えていて頭の形と、髪のかかった額つきが美しい。目つきと口もとに愛^{あい}嬌^{きよう}があつて派^は手^でな顔である。髪は多くて、長くはないが、二つに分けて顔から肩へかかったあたりがきれいで、全体が朗らかな美人と見えた。

源氏は、だから親が自慢にしているのだと興味がそそられた。静かな性質を少し添えてやりたいとちよつとそんな気がした。才走

ったところはあつらしい。碁が終わつて駄目石だめいしを入れる時など、いかにも利巧りこうに見えて、そして蓮葉はすつばに騒ぐのである。奥のほうの人は静かにそれをおさえるようにして、

「まあお待ちなさい。そこは両方ともいつしよの数でしょう。それからここにもあなたのほうの目がありますよ」

などと言うが、

「いいえ、今度は負けましたよ。そうそう、この隅の所を勘定しなくては」

指を折つて、十、二十、三十、四十と数えるのを見ていると、無数だという伊予の温泉の湯桁ゆげたの数もこの人にはすぐわかるだらうと思われる。少し下品である。袖で十二分に口のあたりを掩おおう

すきみおとこ

て隙見男に顔をよく見せないが、その今一人に目をじつとつけていると次第によくわかつてきた。少し腫れぼったい目のようで、鼻などもよく筋が通っているとは見えない。はなやかなところはどこもなく、一つずついえば醜いほうの顔であるが、姿態がいかにもよくて、美しい今一人よりも人の注意を多く引く価値があった。派手な愛嬌のある顔を性格からあふれる誇りに輝かせて笑うほうの女は、普通の見方をもつてすれば確かに美人である。軽佻だと思ひながらも若い源氏はそれにも関心が持てた。源氏のこれまで知っていたのは、皆正しく行儀よく、つつましく装った女性だけであつた。こうしただらしなくしている女の姿を隙見したりしたことははじめての経験であつたから、隙見男のいる

ことを知らない女はかわいそうでも、もう少し立っていたく思つた時に、小君が縁側へ出て来そうになつたので静かにそこを退いた。そして妻戸の向かいになつた渡殿わたどのの入り口のほうに立っていると小君が来た。濟まないような表情をしている。

「平生いない人が来ていまして、姉のそばへ行かれないのです」

「そして今晚のうちに帰すのだろうか。逢えなくてはつまらない」「そんなことはないでしょう。あの人が行つてしまいましたら私がよくいたします」

と言つた。さも成功の自信があるようなことを言う、子供だけれど目はしがよく利きくのだからよくいくかもしれないと源氏は思つていた。碁の勝負がいよいよ終わったのか、人が分かれ分かれ

に立つて行くような音がした。

「若様はどこにいらつしやいますか。このお格子はしめてしまひますよ」

と言つて格子をことごとく中から鳴らした。

「もう皆寝るのだらう、じゃあはいつて行つて上手にやれ」

と源氏は言つた。小君もきまじめな姉の心は動かせそうではないのを知つて相談はせずに、そばに人の少ない時に寢室へ源氏を導いて行こうと思つていたのである。

「紀伊守の妹もこちらにいるのか。私に隙見すきみさせてくれ」

「そんなこと、格子には几帳きちようが添えて立ててあるのですから」

と小君が言う。そのとおりだ、しかし、そうだけだと源氏は

おかしく思ったが、見たとは知らずまい、かわいそうだと考えて、ただ夜ふけまで待つ苦痛を言っていた。小君は、今度は横の妻戸をあけさせてはいつて行つた。

女房たちは皆寝てしまった。

「この敷居の前で私は寝る。よく風が通るから」

と言つて、小君は板間^{いたま}に上敷^{うわしき}をひろげて寝た。女房たちは東

南の隅^{すみ}の室に皆はいつて寝たようである。小君のために妻戸をあ

けに出て来た童女もそこへはいつて寝た。しばらく空寝入りをし

て見せたあとで、小君はその隅の室からさしている灯^ひの明りのほ

うを、ひろげた屏風^{びょうぶ}で隔ててこちらは暗くなつた妻戸の前の室

へ源氏を引き入れた。人目について恥をかきそうな不安を覚えな

がら、源氏は導かれるままに中央の母屋もやの几帳たれの垂絹をはねて中へはいろいろとした。

それはきわめて細心に行なっていることであつたが、家の中が寢静まつた時間には、柔らかな源氏の衣摺きぬずれの音も耳立つた。女は近ごろ源氏の手紙の来なくなつたのを、安心のできることに思おうとするのであつたが、今も夢のようなあの夜の思い出をなつかしがって、毎夜安眠もできなくなっているころであつた。

人知れぬ恋は昼は終日物思いをして、夜は寝ざめがちな女にこの人をしていた。碁の相手の娘は、今夜はこちらで泊まるといつて若々しい屈託のない話をしながら寝てしまった。無邪気に娘はよく睡ねむっていたが、源氏がこの室へ寄つて来て、衣服の持つ薰たきも

物の香が流れてきた時に気づいて女は顔を上げた。夏の薄い几帳越しに人のみじろぐのが暗い中にもよく感じられるのであつた。静かに起きて、薄衣うすものの単衣ひとえを一つ着ただけでそつと寢室を抜けて出た。

はいって来た源氏は、外にだれもいず一人で女が寝ていたのに安心した。帳台から下の所に二人ほど女房が寝ていた。上に被かいた着物をのけて寄つて行つた時に、あの時の女よりも大きい氣がしてもまだ源氏は恋人だとばかり思つていた。あまりによく眠つてゐることなどに不審が起こつてきて、やつと源氏にその人でないことがわかつた。あきれるとともにくやしくてならぬ心になつたが、人違いであるといつてここから出て行くことも怪しがられ

ることで困つたと源氏は思つた。その人の隠れた場所へ行つても、これほどに自分から逃げようとするのに一心である人は快く自分に逢^あうはずもなく、ただ侮蔑^{ぶべつ}されるだけであろうという気がして、これがあの美人であつたら今夜の情人にこれをしておいてもよいという心になつた。これでつれない人への源氏の恋も何ほどの深さかと疑われる。

やつと目がさめた女はあさましい成り行きにただ驚いているだけで、真から氣の毒なような感情が源氏に起こつてこない。娘であつた割合には蓮^{はすつば}葉な生意氣なこの人はあわてもしない。源氏は自身でないようにしてしまいたかつたが、どうしてこんなことがあつたかと、あとで女を考えてみる時に、それは自分のために

はどうでもよいことであるが、自分の恋しい冷やかな人が、世間をあんなにはばかっていたのであるから、このことで秘密を暴露させることになってはかわいそうであると思った。それでたびたび方^{かたが}違えにこの家を選んだのはあなたに接近したためだったと告げた。少し考えてみる人には継母との関係がわかるであろうが、若い娘心はこんな生意気な人ではあってもそれに思い至らなかった。憎くはなくても心の惹^ひかれる点のない気がして、この時でさえ源氏の心は無情な人の恋しさでいっぱいだった。どこの隅にはいつて自分の思い詰め方を笑っているのだろう、こんな真実心というものはさらにあるものでもないのにと、あざける気になつてみても真底はやはりその人が恋しくてならないのである。

しかし何の疑いも持たない新しい情人も可憐かれんに思われる点があつて、源氏は言葉上手ことばじょうずにのちのちの約束をしたりしていた。

「公然の關係よりもこうした忍んだ中のほうが恋を深くするものだ」と昔から皆言つてます。あなたも私を愛してくださいよ。私は世間への遠慮がないでもないのだから、思ったとおりの行為はできないのです。あなたの側でも父や兄がこの關係に好意を持つてくれそうなことを私は今から心配している。忘れずにまた逢いに來る私を待つていてください」

などと、安っぽい浮氣男うわきの口ぶりでものを言つていた。

「人にこの秘密を知らせたくありませんから、私は手紙もようあげません」

女は素直すなおに言っていた。

「皆に怪しがられるようにしてはいけませんが、この家の小さい殿て上んじょう人びとね、あれに託して私も手紙をあげよう。気をつけなくて

はいけませんよ、秘密をだれにも知らせないように」

と言いついて、源氏は恋人がさつき脱いで行ったらしい一枚の薄衣うすものを手にとって出た。

隣の室に寝ていた小君こぎみを起こすと、源氏のことを気がかりに思
いながら寝ていたので、すぐに目をさました。小君が妻戸を静か
にあけると、年の寄った女の声で、

「だれですか」

おおげさに言つた。めんどろうだと思ひながら小君は、

「私だ」

と言う。

「こんな夜中にどこへおいでになるんですか」

小賢こざかしい老女がこちらへ歩いて来るふうである。小君は憎らし

く思つて、

「ちよつと外へ出るだけだよ」

と言いながら源氏を戸口から押し出した。夜明けに近い時刻の
明るい月光が外にあつて、ふと人影を老女は見た。

「もう一人の方はどなた」

と言つた老女が、また、

「民部みんぶさんでしょう。すばらしく背の高い人だね」

と言う。朋輩ほうばいの背高女のことをいうのであろう。老女は小君と民部がいつしよに行くのだと思つていた。

「今にあなたも負けない背丈せたいになりますよ」

と言いながら源氏たちの出た妻戸から老女も外へ出て来た。困りながらも老女を戸口へ押し返すこともできずに、向かい側の渡わの殿たどのの入り口に添つて立つていると、源氏のそばへ老女が寄つて来た。

「あんた、今夜はお居間に行つていたの。私はお腹なかの具合ぐあいが悪くて部屋へやのほうで休んでいたのですがね。不用心だから来いと言つて呼び出されたもんですよ。どうも苦しくて我慢ができませんよ」
こぼして聞かせるのである。

「痛い、ああ痛い。またあとで」

と言つて行つてしまった。やつと源氏はそこを離れることができた。冒険はできないと源氏は懲りた。

小君を車のあとに乗せて、源氏は二条の院へ歸つた。その人に逃げられてしまった今夜の始末を源氏は話して、おまえは子供だ、やはりだめだと言い、その姉の態度があくまで恨めしいふうに語つた。氣の毒で小君は何とも返辞をすることができなかった。

「姉さんは私をよほどきらっているらしいから、そんなにきらわれる自分がいやになった。そうじゃないか、せめて話すことぐらいはしてくれてもよさそうじゃないか。私は伊予介よりつまらない男に違いない」

恨めしい心から、こんなことを言った。そして持つて来た薄い着物を寢床の中へ入れて寝た。小君をすぐ前に寝させて、恨めしく思うことも、恋しい心持ちも言っていた。

「おまえはかわいいけれど、恨めしい人の弟だから、いつまでも私の心がおまえを愛しうるかどうか」

まじめそうに源氏がこう言うのを聞いて小君はしおれていた。しばらく目を閉じていたが源氏は寝られなかった。起きるとすぐに硯を取り寄せて手紙らしい手紙でなく無駄書きむだのようにして書いた。

空蟬うつせみの身をかへてける木このもとなほ人がらのなつかしき

かな

この歌を渡された小君は懷ふところの中へよくしまった。あの娘へも何か言つてやらねばと源氏は思ったが、いろいろ考えた末に手紙を書いて小君に託することはやめた。

あの薄衣うすものは小桂こうちぎだった。なつかしい氣のする匂においが深くついているのを源氏は自身のそばから離そうとしなかった。

小君が姉のところへ行つた。空蟬は待つていたようにきびしい小言こごとを言つた。

「ほんとうに驚かされてしまった。私は隠れてしまったけれど、だれがどんなことを想像するかもしれないじゃないの。あさはか

なことばかりするあなたを、あちらではかえつて輕蔑けいべつなさらないかと心配する」

源氏と姉の中に立つて、どちらからも受ける小言の多いことを小君は苦しく思いながらことづかつた歌を出した。さすがに中をあけて空蟬は読んだ。抜け殻がらにして源氏に取られた小桂が、見苦しい着古しになつていなかつたろうかなどと思いながらもその人の愛が身に沁しんだ。空蟬のしている煩悶はんもんは複雑だつた。

西の対の人も今朝けさは恥ずかしい気持ちで歸つて行つたのである。一人の女房すらも氣のつかなかつた事件であつたから、ただ一人で物思いをしていた。小君が家の中を往来ゆききする影を見ても胸をおどらせることが多いにもかかわらず手紙はもらえなかつた。これ

を男の冷淡さからとはまだ考えることができないのであるが、蓮^は
^{すつば}葉^{うれい}な心にも愁^{うれい}を覚える日があつたであらう。

冷静を装つていながら空蟬も、源氏の真実が感ぜられるにつけて、娘の時代であつたならとかえらぬ運命が悲しくばかりなつて、源氏から来た歌の紙の端に、

うつせみの羽^はに置く露の木^こ隠れて忍び忍びに濡^ぬる袖^{そで}かな

こんな歌を書いていた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年4月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

空蟬

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>